

秋田のケズリカケとその伝承について

木 崎 和 広

I はじめに

私が県内のケズリカケ類の調査を最初に手がけたのは十数年以上も前のことであったが、当時は、秋田市太平（田口清司氏）・角館町雲然（村田竹松氏）・横手市（高橋幸蔵氏）に三人の工人がわずかにその製作技術を伝承しているだけで、習俗的事例もほとんど不明で長い間中断していたのであるが、最近また古記録の中で散見するようになり、1年程の間に、五城目町や、鳥海山麓地区の伝承事例の教示を得るなどの機会を得たので、再調査の資料も加えて、今までの調査の概要を報告し、合せて多少の考察を試みたいと思う。

秋田のケズリカケは、コシアブラやヤナギの灌木の直径2cmほどの小枝を利用するもので、普通は樹皮をはいで60～70cmにきり、屋内で自然乾燥させたものを小刀の切先を使って細工台の上で手前の方に削りあげると、パーマをかけたようにちぢれた美しい木片がたくさん削りだされる。これをたばね、ふくらみをつけて小さなボンデンのように、2～3ヶ所しばり、赤、青、黄色の彩色をほどこしたものが多くみられる。これらの名称は「ヒョウギ」「ホデキ棒」「祝儀棒」などとよばれており、しばらずに削りだしたままのものは「ケズリカケ」とか「ケズリバナ」とよびならわしているようである。

ホデキ棒などと呼ばれるものは、古来の小正月の「カユ杖」からの変化で、これで子のない女の腰を打てば子宝に恵まれるとか、子どもの無病息災を祈願して飾られたとか、農耕予祝や家内招福のシルシとした、などの呪術的用具として広く伝承されていたものであった。古くは、すでに明治20年に坪井正五郎が「削り掛けの種類及び沿革」と題する報告を『東京人類学会報告』第13号に各地の調査見聞事例と文献資料を紹介し、合せて北海道アイヌのイナヲを報告して、全国的な調査事例の報告を提言して注目され、近くは昭和18年に武田久吉の『農村の年中行事』にも類似のものが全国各地にあることが記され、嫁タタキ棒、ホタタキ棒、ハラメン棒、イナケ棒などとよばれていたものである。

II 現在確認された伝承

① 仙北郡角館町雲然（村田武一氏）

角館町雲然は近世からイタヤ細工のさかんだったところで現在もイタヤ箕の製作が数人の工人によって伝承されている。村田武一氏は先代竹松氏よりケズリカケの技術を受け継いだ生き残り工人である。

材料はコサンバラ（コシアブラ）とよぶ灌木の直径2cm程の小枝を60～70cmにきったものを使い、小刀の切先に木片のクサビをはめた工具だけでケズリあげるもので、これを小さなボンデンのように三ヶ所しばって、赤、黄、青の彩色をほどこしたものであるが、これを「ヒョウギ」（写真1）とよんでいる。

古老の伝承では小正月に「ヒョウ、ヒョウ、ツ、ツツ」と唱えながら男児が新嫁の尻をたたいたといわれるが、後には小正月に、もらったり、買ったりして、正月飾りとして神棚に飾るようになり、正月の年の市や、羽後町のアグリコ市、横手のカマクラに売りだしていたという。

現在は特別注文があると郷土玩具として製作されているだけである。（注①）

② 秋田市太平（田口清司氏）

秋田市太平も角館町雲然とならんで近世からイタヤ細工を伝承しているところである。

田口清司氏も祖父与一、父銀蔵より技術を受け継いだ三代目工人である。

材料は秋に近くの裏山から6～7年生（径2～3cm）のコシアブラをきってくる。皮をはいで60～70cmに切って、家の中に棚をつけて約1ヶ月乾燥させる。（生木では独特のチヂレがないし、乾燥がすぎるときれてしまう）これを小刀でケズリだすもので、頭部だけを赤く彩色してケズリカケの部分2ヶ所しばるものでこれを「ホデキ棒」（写真2）とよんでいる。

太平では31日の大晦日の夜に子どもたちが手に手にこのホデキ棒をもって、「なるか、ならぬか、ならねばぶったぎるぞ、なるなら、なるほうに、おどれ、おどれ」と大声で唱えながら屋敷まわりの果樹をたたいてまわる成木責に使った。

その後は家々の仏壇に供えて正月をむかえ、正月うちあげておいたという。

上北手地区では小正月のカマクラ（ワラ小屋）焼の時に、このホデキ棒に火をつけて持ち帰り、家の前に立てもやし災難よけにした。

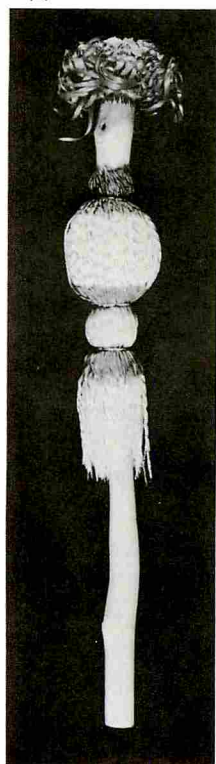
また、エズメにはいっている子どもに持たせたり、エズメの縁にたてるなどとしたという。

太平ではもうひとつ、ケズリカケだけを長くした「ケズリバナ」（写真3）とよぶものもあった。秋田市郊外の農村部の檜山、上北手、太平などでは、これを正月のマユ玉飾りに稲穂のかわりにとりつけて豊作祈願の予祝とした。

またこの「ケズリバナ」を2月1日の年祝いの時に、ヤナギの木にこれを飾ったところもあった。（上北手）

これらのホデキ棒は正月までに製作し、地元のほか秋田や土崎の正月市に手わけをして100本も200本も売っ

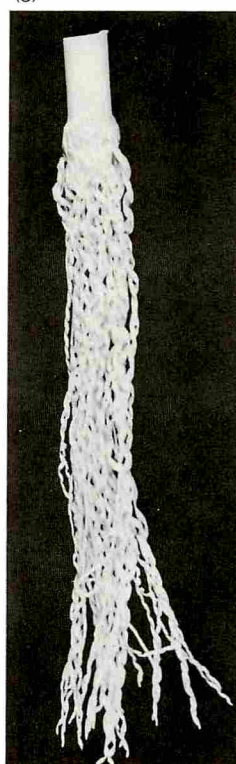
(1)



(2)



(3)



(4)



写真1：「ヒヨウギ」角館町雲然村田武一氏製作 長48cm径2cm、ケズリ30cm、赤、青、黄の彩色あり

写真2：「ホデキ棒」秋田市太平 田口清司氏製作 長70cm径2cm、ケズリ26cm頭部のみ赤の彩色あり

写真3：「ケズリバナ」秋田市太平 田口清司氏製作 長40cm、ケズリ30cm（彩色なし）

写真4：「祝儀棒」横手市 高橋幸一氏製作 長40cm、径1.5cm、ケズリ18cm、赤、青、黄の彩色あり

たということである。

③ 横手市神明町（高橋幸蔵、幸一氏）

現在、横手市では高橋幸蔵、幸一父子が製作技術を伝承しており、五代にわたる伝承だという。

形態や彩色は角館とほぼ同じであるが現在のものはやや小づくりで「祝儀棒」（写真4）とよんでコシアブラを使ってケズリあげたものである。古くはヤナギやコウゾでつくったもので、よび名もホタキ棒、ケズリカケなどともいい、小正月行事のカマクラに男の子どもたちが、若い女の尻をたたいて、子どもの出産と子孫の繁栄を祝ったものだという。

最近では、カマクラにつづく、ボンデン奉納祭りのボンデンにその形が似ているので、多くは「ボンデンコ」ともよばれ、郷土玩具として、正月の朝市や観光土産として、わずかばかり売られている。（注②）

④ 南秋田郡八郎潟町浦大町（北島吉六氏明治29年生）

秋田のケズリカケとその伝承について

八郎瀧町では84才になる北島吉六氏が製作技術を伝承している。ウルシやイタヤを材料としてケズリあげるもので、子どもの杖になる位の60～90cmの長さにケズリ、赤い彩色をしてサイの神棒とよぶものである。これは小正月のサイの神祭りに子どもたちが、これを持って唱え言をしなげら門口や地面をたたいて家々をまわり、お金や餅をもらって、家内繁盛など招福してまわるもので、正月の市にたくさん売り出された。(注③)

⑤ 南秋田郡五城目町裏横町(児玉清治郎氏明治40年生)戦前は何人か居た作者も現在は児玉氏一人だけである。また南秋田郡井川町赤沢の古老の話でも、昭和の十年頃まで、小正月のサイの神祭りに、子どもたちが4～5人のグループで、ホデキ棒を杖のように持ち歩き、各家々を唱え言をしなげら廻ったという。五城目の市で男児のある家では祖父や父が買い求めて子どもに与えたものでケズリカケの先に赤い色がぬってあったという。(注④)

⑥ 由利郡象瀧町大森
鳥海山麓にあたるこの地区では今も、小正月のサイの神祭りや鳥追い行事が、変質複合したかたちであるが古



写真5：「初嫁棒」象瀧町大森(長60～70cm)
(嶋田忠一氏提供)

い習俗をともなって伝承されている。

11日に部落の上のサイの神の祠のある所に男の小屋、下には女の小屋をそれぞれつくり、15日の朝にこの小屋を焼き、下の女小屋から先に、女兒たちが背中にカゴを背負って、ショットメまわりと称して部落の家々をまわって餅をもらい歩く。男小屋は午後から一番鳥追いと称して、男児たちがタイコをたたき、鳥追い唄を歌いながら各家々をまわって餅をもらい歩くのであるが、この時に初嫁のある家では、「初嫁ではれ」とはやしたて、初嫁が正装して座敷の真中に正座すると、持参した「初嫁棒」をカクにして「初嫁ではれ、ツツグは今だ」とはやしたて、とびはねながら嫁のまわりをまわるのである。(古くは実際に嫁の身体をついたものだといわれる)これが終ると、甘酒をごちそうしたり、餅をくれたりして、ひきとってもらう。このように家々をまわる時は、小戸(通用口)からはいって、大戸(玄関)から帰るのが普通である。

この「初嫁棒」は(写真5)、各家の当主(父親か祖父)が14日の夜に正月飾りなどといっしょに作るものでタラの木を切り柄の部分だけ皮を残してはいだ棒に白和紙の切紙を結びつけたものである。この切紙結びが何時頃から作られ、それ以前のケズリカケがあったかどうかは、今までの調査では残念ながら確認できなかったが、ケズリカケの一種か、その変化と考えるのが妥当であろう。何よりもはっきりと嫁タタキ棒の習俗を伝えている貴重な事例である。また鳥追いが終わった後の初嫁棒は部落のサイの神の祠におさめることになっている。

また隣接する横岡地区でも15日の夜に行う鳥追い行事の、夕方から各家々をまわって餅をもらい歩く二番鳥追い(古くはこれをアマハゲともいった)にも、初嫁、初婿のいる家では、「初嫁(初婿)ではれ、ではれ」とはやしたて、初嫁や初婿は、正装して出むかえ、切り餅を子どもたちにくれてやるという似た習俗が今も残っている。初嫁棒の存在はないが古老の間に大森地区と同じ、「初嫁ではれ、ツツグは今だ」のはやし言葉が伝承されていることを考えれば、同じサイの神祭りと、嫁見、嫁タタキの習俗が、この地方に広くあったことがうかがい知られよう。(注⑤)

以上が最近の再調査や教示で得た伝承の概要であるが工人としての製作技術の伝承者は、現在も太平の田口氏角館の村田氏、横手市の高橋氏と3人であったが、新たに八郎瀧の北島吉六氏と五城目の児玉清治郎氏を知ることができた。太平や角館のイタや細工の工人の間では、余技として製作していた者も幾人かいたが、特殊な技術

を必要とするので、時代と信仰行事の変遷の中で、特定の者だけが父子相伝というかたちで製作技術を伝承して今日まで生き残ったものである。

名称は、秋田市太平、五城目周辺は「ホデキ棒」、角館は「ヒョウギ」、横手は「ホタキ棒」「祝儀棒」などの古名も残り、信仰の呪具としての習俗は、角館、横手、五城目周辺ではいずれも小正月のカマクラやサイの神祭りの「嫁タタキ棒」として使用されたことが、古老の話として伝えられている。秋田市太平では、成木貴の予祝呪具として使用されたというが、後にふれるように、旧城下町では近世の記録にカマクラやサイの神祭りに使用されたことがでているので、周辺地区にも同じ伝承があったと推測される。また、太平や角館の伝承の中にみられるように、正月の神棚や仏壇の飾りとして、家内繁盛の祈願の呪具としたり、幼児のエツメに飾って、子どもの成長と無病息災を祈願する呪具とした習俗のあったことも知られる。

予備調査の段階であるが、鳥海山麓の大森地区にケズリカケではないが、切紙を結んだ類似のものが「初嫁棒」として、サイの神祭りの鳥追い行事の中で、現に初嫁ツツキというかたちで伝承されていることは、生きている習俗として貴重な事例であった。

このような呪具をともなう、信仰行事や習俗は、カマクラやサイの神祭りの衰退や消滅とともに、都市部や農村の中心集落から先に消え去ったようであるが、昭和10年代の戦時下体制と、ファッショ的な精神道徳の規制によっていっそうその衰退消滅を早めたものであろう。

しかし、鳥海山麓地区にみられるように、サイの神信仰の根強い伝統をもっていた地域では、残存する習俗伝



写真6：「ぼんでき棒売」（昭和7年）勝平得
之版画（秋田県博蔵）

承があるようにも考えられるので今後も、全県的な範囲で、再調査や教示を得ながら実証を広めたいものと考えている。

Ⅲ 文献、古記録にみえる事例について

秋田のケズリカケとその習俗にかかわる記録を、手もとの文献や古記録の中から参考資料としてあげてみたい。

④ 菅江真澄遊覧記の『月洒遠呂智泥』（文化9年—1812—太平山登山への途中の見聞）

「庵の前に塚あり、この春童の身まかれるをここに埋して、ほうたき棒とて粥杖めけるものをさしたるが、彩も雨露に落て、そのさま蝦夷の木幣^{イナラ}でふものにつゆことならずしてヌシヤカムイを祭る、おきつきにひとしかりき」（ほうたき棒のこと）

「山の神沢というを分々いたれば、うべも大山祇の社ぞあんなる。広前に敷の鳥居のあるごとに、木の枝の柄ひしひしと投掛たり。又、大なるくろ木を三尺ばかりにきりて斧して皮うち立て、これをあまた社の傍におしたてたり、とへばいらへて逆樹と唱ふ。蝦夷の木幣を略に造りなしたるにひとし（中略）こや、山賤らが山の神にもと末をまらするのゆえをもて、逆樹をもや直く立て奉らんかし」（逆木のこと。図1）

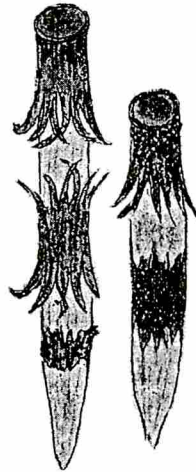


図1 山神社に奉納する「逆木」

『菅江真澄集第4巻』
（文化9年）「月洒遠呂智泥」より

⑤ 『羽州秋田風俗問状答』（文化11年～1814）

道祖神祭の事。

「此事は十五日を用う、是を俗に歳^{トシ}の神と申す也。此日には左義長をし侍る是を鎌倉と申す也。鎌倉の祝の躰は二三日ばかり前より、門前に雪にて四壁を造り厚さ一尺二尺にし水そそぎ氷かためて、それへ其日には茅を積み門松飾ワラなど皆積みて、四壁には紙の旗さまぎまの四手切かけし柵など飾り、わらべ打群れはたき棒てん

秋田のケズリカケとその伝承について

でに提て、行きかふ女あらば尻うたんと用意す。(中略) 暮れ行く頃、火の熾んに燃え上るを伝えて四壁に立たる米の俵結付し標を引きぬき火を移して振まはす。(中略) 此事は家継すべき男を産たる家にて其子の十五になるまではする事に候へば、一町に三四五六は必らず有る也。

(中略) 是は郭内侍町の躰にて候。郭外の町々にも候へしが、家居建込みて火の災を恐れて今はたまたまにて候。田家にもあれど十五日夜にて一里に一所あり、きわめて有にもあらず。はたたき棒は柳を三尺ばかりにし白く削り、其先を削り掛のように削りて赤く染む、自然男根の形にも似かよひたり。爆竹の時の物故に火焼棒なりと云ひ、又若き女の子あらん事を祝ひぬるものなれば子抱棒なりとも申す。粥杖の趣もはらめり」

歳の子の事。

「是は郭外の街坊を七つに割て、其一つより作り出す年に順番なり、其躰は歳の子の禿倉を一人にて軽る々と背負ふほどに造り置き、内には雌雄の紙びなを入れ、幣帛を納めてはたたき棒の大なるを飾り、一人これを背負ふ立鳥帽に水干を着、顔おかしげに彩色して其先に出たつ、引つづきて此年に当れる町より十四五以下の男児色々の姿にそうぞきて、雪車を船或は屋台などに飾りなして上下着たる警固乳母などあまた引供して二十も三十も出す事にて候。まづ城へ登りて手ごとにはたたき棒を杖にし、床の上を大につきとどろかして堂を背負ふたるもの聲ふりたて祝の詞を申す。『さいの神のお祝ひは、戌亥のすみにかめ七つ、七つのかめに湧く泉、若君様十三人お姫様十三人、これの館のお知行は、萬々億々数知らず、四方の山よりこがねしろがね湧くように湧くように』。あまたの兒ども皆同時に申す也。それより



図2 「はたたき棒」と「歳の子の禿倉を背負の躰」
『秋田風俗問状答』（文化11年）絵図より

家老の宅めぐり町の奉行へも参る其さま皆同じ」。(図2)

㊦ 『松浦武四郎紀行集』上、「鹿角日誌」嘉永4年—1849—(ケズリカケ。染木のこと)

「祠の後に連理木一株。是又老木也。扱此辺り木にて陽形を作り、又石にて作るも有。小なるは壺寸式寸より大なるは五尺六尺に一囲半位のもの多し。何故に是は奉納なせし由聞侍りければ、山深く樵夫共入る時は此社に参詣して無事を願ひ登山するよし。其帰るさ此如ものを造りて川に流し、又は馬に背負せ等して此処に納ると云たり。惣而奥羽の兩國はケズリカケと号て陽形を門口にかける村多し」

「古来男の女に恋し通ふに文も無して木を切、草木の花果をもて染て其しるしとせしもうべなるべし。扱此辺り道の傍に小祠等の有るを見るに、彼蝦夷地に用ゆるエナヲ、本邦の削りかけ也。是を奉る然多し。是等も実に古来の風の存するなるべしと思わる」

㊧ 『秋田県史・民俗・工芸篇』。(昭和37年)に引用された滝沢馬琴の『耽奇慢録』(文政7~8年)

「秋田ノ国ノ産イナケ棒。是モ正月十五日、サイノ神祭ニ持。越後柴田祝木ノ類也。解云、イナケ棒ハ、稲毛棒ニテ、コレ稲穀豊登祈祝ノ義ニテ名ヅケタルモノナルベシ。製作ケズリカケニチカシ。長サ二尺一寸一分弱。雁来紅ノ液汁ヲ以染ルトイウ」

㊨ 『郷土研究』第7巻6号(昭和8年)「樹木と神と」 早川孝太郎

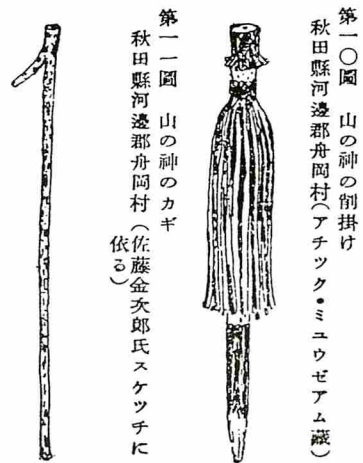
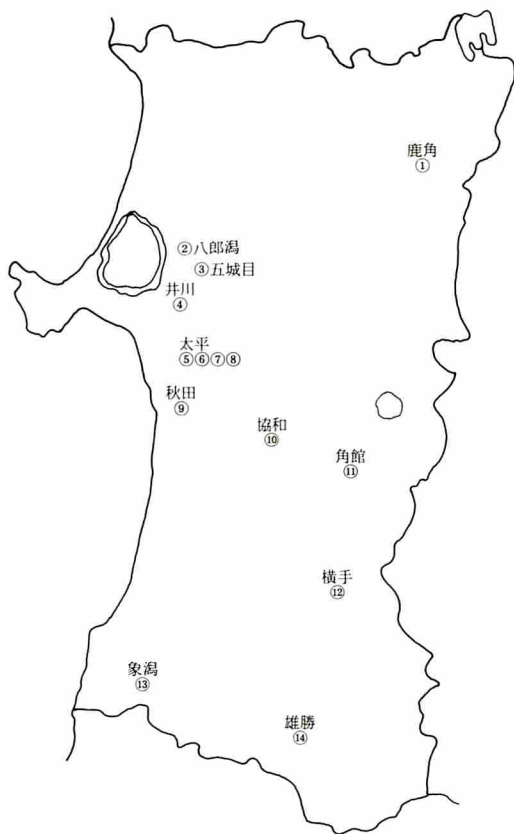


図3 「山の神の削掛け」と「山の子のカギ」
『郷土研究』7の6(昭和8年)
「樹と神と」(早川孝太郎)より

秋田県におけるケズリカケ伝承の分布



秋田県におけるケズリカケ伝承の分布一覧

地名	分布地	名称	製作伝承及び記録伝承
鹿角	①	ケズリカケ 染木	松浦武四郎「鹿角日誌」
八郎潟	②	サイの神棒	北島吉六氏製作
五城目	③	サイの神棒	児玉清治郎氏製作
井川	④	ホデキ棒	(サイの神祭り)
太平 (秋田市)	⑤ ⑥ ⑦ ⑧	ホデキ棒 ケズリバナ ホウタキ棒 逆木	田口清司氏製作 菅江真澄「月廻遠呂 智泥」
秋田	⑨	ホタタキ棒	「秋田風俗問状答」
協和	⑩	山の神の削掛	早川孝太郎「樹と神と」
角館	⑪	ヒョウギ	村田武一氏製作
横手	⑫	祝儀棒	高橋幸一氏製作
象潟	⑬	初嫁棒	(サイの神祭り。鳥追い)
雄勝	⑭	(モリ木)	菅江真澄「小野のふるさと」 「秋田風俗問状答」

注 ⑤は現存する

「秋田県河辺郡地方で、山仕事に携る者が、初山入りに、木で拵へた鉤と削掛けを用意して、山中に木を選んで鉤を掛け、その根本に削掛けを打ちこんでゆく。之を山の神祭と言った。」(佐藤金次郎氏報) (図3)

IV 伝承形態についての考察

以上のように、秋田県内の習俗伝承としては、ホタタキ棒、ホデキ棒にみられるように近世から、小正月のサイの神祭りにともなう、子宝祈願の嫁タキと、家内繁盛祈願が主流のようである。また太平の製作するケズリバナは、マユ玉の稲穂がわりとしたなどから、神供の飾ものの意味もあったと推察されるものであり、角館、太平の神棚や仏壇にあげて置いたという事例は、屋外の行事習俗がなくなったからではなく、本来的にケズリカケ類が神仏への供具的役割と意味をもっていたものと考えられる。そのことは、菅江真澄の『月廻遠呂智泥』にみえる太平野田村東光庵の童の墓所にほうたき棒があったことや、松浦武四郎の「鹿角日誌」にある、「ケズリカケと号て陽形を門口に懸る村多し」の見聞によって知ることができるであろう。

類似のものとして菅江真澄の記録した「逆木」は、山仕事をする人たちの、初山入りや、山神信仰にともなうものでカギ状の小枝を(枝カギ)樹上にかけてその下に、樹皮を二段にケズリわけた逆木を打ちこむもので、上にかける枝カギは陰(女)地面に突きさす逆木は陽(男)の表象であり、松浦武四郎の見聞した陽形の奉納も同じ意味あいをもつものである。早川孝太郎の「樹木と神と」に示された事例と民俗学的見解(無名者の神の誓いによる、神降臨と占有)にも符合するものである。形態から逆木をケズリカケとみなすことによって、ケズリカケが陽形の表象として信仰的呪術的機能をもっていたことによって、嫁タキ習俗にも符合するものである。

坪井正五郎の「削り掛けの種類及び沿革」(東京人類学会報告第13号—明治20年3月—)と「削り掛け再考」(東京人類学会報告第14号—明治20年6月—)の中から関連事例を参考図と合せて引用してみたい。

当時関東では小正月にケズリカケを軒先にさしこんだり、つりさげる風習が一般にあり、もっとも都市化した東京あたりが、ケズリカケの柄が1寸ばかりに短く(熱海あたりは2尺)退化したことを報告しているが、明治以前、江戸の大名屋敷には2~3尺のものをつり下げたと伝えられている。(参考図1)

特に羽後飽海郡大宮村の事例報告は注意する必要がある。15日に若者が、新婦のある家へ餅もらいに行き、戸口に出る新婦を削り掛け棒で前後左右から衝くというもので

この削り掛け棒は、柳の皮を半ばはいで、その境を短かくケズリカケたものである(参考図1の⑤)。飽海郡は山形県境にある由利郡の隣接地方であることから、再調査で確認された鳥海山麓の象潟町大森に伝承されるサイの神祭りの、「初嫁棒」「嫁ツツキ」の習俗と符合するものである。

また、墓所にケズリカケをたてる習俗について、秋田では菅江真澄の記録を特異とするが、「削り掛け再考」で、八丈島末吉の事例が報告されており(参考図) 葬送にともなうシカバナ(名古屋、八丈島)との同義についてもべている。

さらに、伊豆君沢、田方郡の事例として15日の小豆粥の釜をかきまわした粥棒をもって、その夜に果樹を打ちたく習俗があり、もっと古くは内浦あたりで、同じく粥棒をかきまわした粥を果樹にも葉に盛って供え「なるかならぬか、なろうと申せ」と大声で唱えるほか、年頭の礼に来る新婦を待ち受けて、その粥棒で尻を打つ行事のあったことが報告されているが、これは太平に伝承されていた、ケズリカケ(ホデキ棒)による成木責習俗との符合に示唆を与えるものである。

北海道旅行を体験し、近世アイヌの生活を見聞した菅江真澄や松浦武四郎がケズリカケの類をアイヌのイナヲと同じか、略したものと解しているが、坪井正五郎も『蝦夷産業図説』から十五種を縮写引用して(参考図2) アイヌ名称と用途を紹介した後、アイヌ語のヌシャとヌサ。イナヲと祈り麻、イナヲとイナホの比較考察のうえで、松浦武四郎『蝦夷葉那志』などからの見聞考説をいれて、ケズリカケは日本古来の神祭りの用具であったが奥羽地方やアイヌの間にのみ古風が残り、他の地方は立派な幣帛にだんだんと変化したものであろうとのべている。不明にして、この考察に対する発展的検証の資料に接していないが、イナヲ、ケズリカケが幣帛以前の神事祭具として同源のものとしても、信仰行事にともなう呪術的な役割や機能の面で、その伝承の質を異にしている民族信仰や、宗教行事とのかかわりの検討が合せて必要であろう。またアイヌと奥羽地方のみに残存した古風だとすることも、今日では問題であろう。その後の調査でケズリカケ類の分布事例は全国各地に及ぶものであったし、幣帛はそれ自体の変化の系譜はともかくとして、宗教(神道)の組織的系統化と管理専任者としての神職の成立によって、神事祭具は均質的統一性をもって近世や明治近代には村々の鎮守社まで侵透していたものであるから、奥羽地方といえども積極的代替えがすすんだと考えるべきであろう。むしろ呪術信仰として組織宗教が関

与できなかった、土着の民衆の直接管理にかかわる信仰行事にのみ、古風としてケズリカケが残存したと考えるべきでなかろうか、従って、そのような民衆の管理する呪術的信仰行事の多い地方にこそケズリカケの分布があったと解したい。

なお、秋田のケズリカケ類似の資料として「染木」「モリ木」を注目したい。菅江真澄「小野のふるさと」(天明5年)の紀行のなかで雄勝郷の婚礼習俗として、「モリ木」とよぶ2尺ばかりのヌルデの木を婿方、嫁方より2本づつ持ちよって交換し、この木を婚礼の日に嫁帯の尻にあてて嫁背負いに使ったというもので、錦木の遺風であろうと記録している。『羽州秋田風俗問状答』婚礼の事、(文化11年)にも農家の嫁入りは人に負われて来るが、ヌルデの2尺ばかりの「モリ木」を腰にあてて背負うもので、雄勝ではこの木を彩色して婿方より贈ることありとし、錦木の余風として、同じことがでている。松浦武四郎「鹿角日誌」(嘉永2年)にも、錦木の余風として、男女の恋い通うシルシとして、木をきり草木の花果で染めた染木のあることを記録にとどめている。この「モリ木」について、中山太郎が『諸国風俗問状答』の注釈で、「モリ木は錦木の遺風でなく此の木を彩り婿方より贈ることがあると云う点より推すと、例の孕待棒に類するものと解したい」と見解をのべているが、仲人木の古風を表象した鹿角の錦木は、すでに近世では、1本の染木に退化し、さらに婚姻儀礼の呪儀、呪具として残存し、ケズリカケの彩色棒の持つ、生殖予祝の意味が付加された習俗として、事例は少ないが、秋田のケズリカケの伝承系譜の中に位置づけておきたいと考えているものである。

参 考 文 献

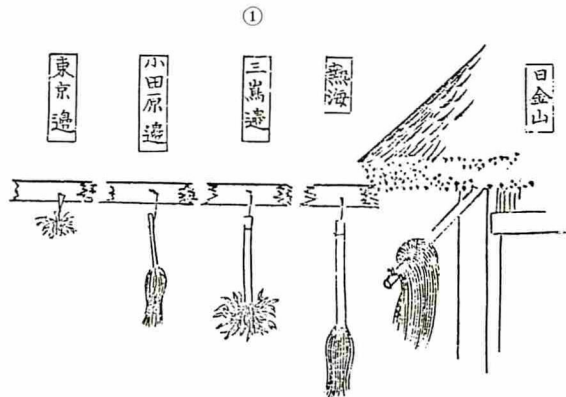
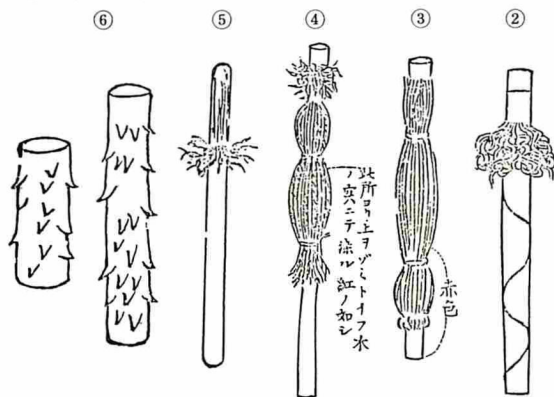
- 「削り掛けの種類及び沿革」坪井正五郎(『東京大学人類学会報告』第13号 明治20年3月)
- 「削り掛け再考」坪井正五郎(『東京大学人類学会報告』第14号 明治20年6月)
- 『農村の年中行事』武田久吉 昭和18年12月
- 『耽奇漫録』滝沢馬琴(文政7~8年)
- 「月洒遠呂智泥」菅江真澄(『菅江真澄集第四巻』昭和7年3月)
- 「小野のふるさと」菅江真澄(『菅江真澄集第四巻』昭和7年3月)
- 「羽州秋田風俗問状答」(文化11年)(『諸国風俗問状答』中山太郎 昭和17年10月)
- 「樹木と神と」早川孝太郎(『郷土研究』7の6 昭和

秋田のケズリカケとその伝承について

8年)

- 『日本の民具・山、漁村』第3巻 昭和41年2月
- 「鹿角日誌」松浦武四郎（『松浦武四郎紀行集』上 昭和50年10月）
- 『秋田県史、民俗・工芸篇』昭和37年3月
- 「こども風土記」柳田国男（『定本柳田国男集』第21巻 昭和37年12月）

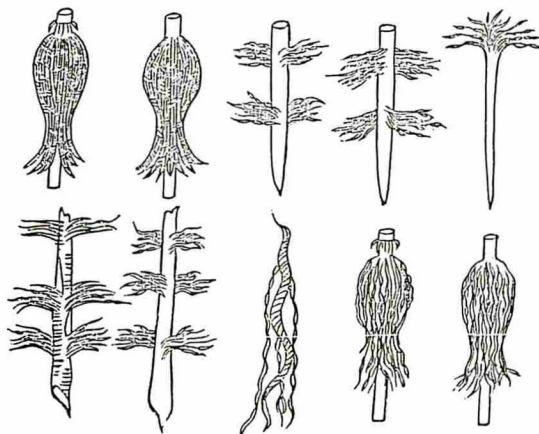
- 注① 角館町渡辺小勝氏の教示協力を得た。
 ② 横手市薄葉篤藏氏の協力を得た。
 ③ 五城目町小野一二氏の教示を得た。
 ④ 県立博物館磯村朝次郎氏の教示を得た。
 ⑤ 象潟町横山正義氏、県立博物館嶋田忠一氏の調査協力を得た。



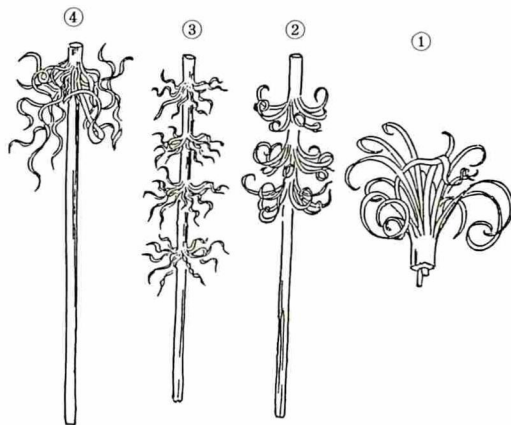
参考図 1

- ① ケズリカケを軒先にサシたりツリさげた様子（関東地方）『東京人類学会報』第13号「削り掛けの種類及び沿革」より
 ② 四国高松の婦人の尻を打つ祝棒

- ③ 越後柴田の幸神祭の祝木
 ④ 骨董集にある羽川のほいたけ棒、祝儀棒
 ⑤ 羽後飽海の新婦を衝く削り掛け棒
 ⑥ 下野の田家で大晦日につくる粟棒と稗棒



参考図 2 アイヌのイナヲの図(蝦夷産業図説より)



参考図 3

- ① 新島の削り掛け（ハナ）
 ② 神津島の削り掛け
 ③ 八丈島末吉の削り掛け（神棚に上げ墓場にもたてる）
 ④ 八丈島の削り掛け（軒にさげ、門口にもさげる）